

踊と幼兒教育

水島 さゆり

一、自然は踊る

灰皿に置かれた吸ひさしの煙草の煙が、空氣の

ほのかな動きに連れて、ゆるやかに揺れて、流れて、なだらかに、おもむろに、面白く空中に描き出す微妙な動きの美しさを、私は嘆稱する一人であります。

春風に吹かれて、可愛らしく、かぶりかぶりを振る黄水仙の小首、「やれ打つな蠅が手をする足をする。」一茶にあはれみをかけられた蠅の手足の、あの洗練された運動、古池に飛込む蛙の颯爽たる姿、大空に輪をかく鳶の悠然とした態、流れのま

に、あや織りみだる水底の藻のしなやかな踊など、自然界の森羅萬象は何れも驚嘆に値する舞踊の名手であります。

今は亡くなつたイサドラ・ダンカンといふ婦人は、前にも後にも世界にたつた一人の名ダンサーだと謂はれてをりますが、其のダンカンは誰に學び、誰に習つたかと言ふと、一にも自然、二にも自然、風に吹かれて地上をころがつて行く木の葉の動きを學び、のびて、ふくらんで、起きて、崩れる大海の波の動きに倣ふといふやうに、ダンカンは自然の動きに心を打込んで、遂に舞踊の眞髓を會得したのださうであります。

嘗て露西亞のダンサーのバツロバが日本に来て
瀕死の白鳥を踊つたことがありました。それを見
てゐた私は、何時の間にか太古其のまゝの森の中
へさまよひ込んで、捨てられた一面の鏡の様な池
のほとりて、今や死になんなんとする一羽の白鳥
の、悶えと苦しみとをしみ／＼と見てゐるやう
な、言ひやうのない淋しい心持に沈んだのであり
ました。白鳥の靈がバツロバの四肢五體に充満し
て、其の瀕死の面影が美しい藝術として現はれた
のでありませうが、バツロバは誰にあのダンスを
學んだのでありませうか。

私は又壽美藏等が秋の蟲を踊つたのを見たこと
がありました。背景は枯尾花が二三本の、見るか
らに荒涼たる晩秋の野でありました。月影と八千
草との涼しい世界を我がもの顔に、美音を誇つた
歌姫の一群、鈴蟲・松蟲・馬追・こぼろぎ・轡蟲に機
織蟲、何れも今は身にまとい薄ものを吹く嵐のつ

れなさをかこち、か弱い身に刃を提げて迫る冬の
無慈悲を嘆いて、慄き怯えてゐる。其の蟲の姿に
私は限りなき哀愁をひし／＼と感じたのでありま
した。

私は思ひます。太陽は燃え、月も星も動いてゐ
る。天地間の物皆は動いて居る、踊つて居る。生
に踊り、死に踊り、喜びに踊り、悲しみに踊つて
ゐる。眼をとめて森羅萬象の動きを見よ。森羅萬
象の動きを踊れ。そして自然の深いもの、尊いも
のに觸れて、己を深め、人生をして意義あるもの
たらしめよと。

私は言ひます。人は人に學び、人に倣つて踊ら
うとしてゐる。出鱈目に人が鳴らす楽器の音に合
せて、自分をごまかし、人生をごまかす踊を踊ら
うとしてゐる。自然界の森羅萬象は、人間には聞
えない大宇宙のリズムに連れて、偽りのない、ご
まかしのない赤裸々の踊を踊つてゐる。眼を開い

て、自然の動きを見よ、自然の踊りを踊れと。

二、雀を踊る兒―石井漢氏の

動きの教育―

子供は純真なものであります。子供は穢れがなく、神に近い者であります。自然に親しみ自然の愛を受けて、喜んで悲しんでも、其の心の動きが其のまま、自然に身體の動きとなつて現はれて出ます。子供は何かに附けて、踊つたり跳ねたりいたします。自然は踊る、自然の兒である子供は踊る、其の子供の教育として、踊はどう教育するか、此の問題は子供の教育上大切な問題の一つであります。之に就いて、私は現代の舞踊家石井漢氏の教育説に賛成する一人であります。石井氏は若し自分が子供に踊を教育として授けるなら、先づ子供を集めて、リズムによる簡単な身體の運動法を知らせる。或程度の動きが自由になつた時に

其の子供を連れて屋外に出る。其處に若し雀が遊んでゐたら、何よりも先づ其の雀の運動に十分な注意を拂ふ様に仕向けるといふのです。雀の運動に注意させる。之が子供の動きの教育、踊の教育の上で、極めて重要な點であることは言ふまでもありません。子供は好ましげに、楽しんで雀の運動を観るのでありませう。其の印象の薄らがないうちに、石井氏は子供達を早速ピアノのある室に連れて行つて、其の子供達の頭の中に印象されたゞけの雀の運動を、自分自身の體の運動で、再現させる、そして子供の運動につれて、ピアノで簡単にリズムをとつてやらうと言ふのです。

其の時、假りに甲の子供はトン／＼と前に飛びながら駆けて行つたとします。次に乙の子供はトン／＼と駆け出して急に立止つて、キョロ／＼とあたりを見廻したとします。次に丙の子供は、トン／＼と飛び廻つて、急に大きく飛

上つて其處に立止り、キョロ／＼とあたりを見廻したとします。これら三人の子供の運動に就いて石井氏の所感は次の通りであります。「甲の子供よりは乙の子供の運動の方が、乙の子供よりは丙の子供の運動の方がより複雑であります。此の三人の子供の運動の相違は、言ふ迄もなく三人の子供の頭の相違でありますが、私は何も運動の巧拙に目標を置いてゐるのではなく、これによつて、雀の運動といふものに對する注意力を喚起することが出来れば足るのであります。此の次に又何處かで、雀を見ることもありませうが、其の時には、此の子供達に限り、決して無關心で素通りの出来なくなることを信じます。そして注意をすれば、其の雀達は決して以前見た時の雀達と同じ運動をやつてゐるわけはありません。其處に子供の興味がそゝられます。」

三、自然の動きを見る者

石井氏の子供に對する踊の教育の眼目は、自然の動きの興味を起させる事にある様であります。前のは雀の例でありましたが、草木に例を採つても同様で、「同じ強さの風を受けて居つても、松の木の子の動きと、柳の枝の動きと、麥の葉の動きとは自ら異つた所があつて、各獨特な動き方をしております。それは各草木の體質の相違から來てゐることは言ふまでもありません。要するに子供に動きの興味を與へるといふことは、子供の頭に今まで氣づかずにゐた、動きから來る新しい世界を展開させてやることになりません。動きの教育を受けなかつた人は、大人になつても特別に大きな動き以外に無關心ですが、動きの教育を受けた人は路傍の小さな草の葉の動きにも自分の全生命を委ねることが出來ます。音に對する場合、色彩に

對する場合も同様です。」と石井氏は言つて居られます。

これで思ひ出した話か二つあります。樂聖ベートルベンは好んで散歩をした人でしたが、或晩恐しい暴風雨をちかしてまで散歩を試みました。濡鼠になつて、激しい風と強い雨とに揉まれ、たゞかれ、攻め抜かれてあるきました。ベートルベンは天地のうめきの中へ、風雨の雄だけびの中へ、木のうめきの中へ、自分の身を投じて、一つになつてうめき、同じ叫びを叫んで、嵐の樂を心の樂譜にしつかりと刻み附けてしまひました。やがて其の樂譜は五線の上に寫し出されて、世界の樂壇に不朽の調べをとゞめるやうになつたのであります。音に對する興味が高潮に達すると此の如き偉大なる藝術を産み出すやうになるのであります。

今一つは繪畫に關係した話であります。泉州堺の一國寺に、狩野法眼元信の描いた繪があります

が、其の繪をかいだ由來が面白いので話の種になつて居ります。一國寺の和尚は、居候の畫師が二年経つても三年経つても、何一つかゝないので痺れをさらせ、「何處へなりとも遊びを。」と言ふと、畫師は、「それは名殘惜しい。」と言つて、始めて繪筆を採りました。夜になると畫師はしきりに様々の身振をするので、小僧や和尚が面白がつて窺いて見る。知らない畫師は夜な夜な身振をこらす。さうして晝毎に襖の表に見事な鶴の姿を様々に描き出して行く。畫師は毎夜身を鶴に擬して我が姿を鳥に化せんが爲に心根を打込んで居たのであります。其の丹青の妙は今も尙人口に膾炙してをります。此の繪は焼けて今は無いとも傳へられてゐる。

それはともあれ、石井氏が、「路傍の小さな草の葉の動きにも自分の全生命を委ねることが出來ます。」と言はれたのは、どんな小さな草の葉にも、

宇宙の生命が働いてをり、大自然の力が動いて居るといふ事を暗示されてゐるやうに思はれます。現代の或文學者は、病床にある數日の朝な夕な、庭前の樹木の動きをしみじみと觀てゐるうちに、樹木と自分とが同じ感じを感じるやうになつて、樹木を流れる大自然の生命が、自分の中を流れる宇宙の生命を喚起して、長い長い間疑問であつた「生命の力」が豁然として自覺され、悟了し得られたと云ふ體驗を語つてをります。

自然の動きを動かせ、自然の踊を踊らせる。これが子供の踊の眞髓であると同時に、子供の教育の根柢ではなからうかと思はれます。

x x x

x x x x

山家集より

吉野山こずゑの花を見し日より

心は身にもそはずなりにき

ねがはくは花の下にて春死なむ

そのきざらぎのもち月のころ

佛にはざくらの花をたてまつれ

わが後の世を人とぶらはば

花にそむ心はいかで残りけむ

すて果ててきとちもふわが身に

西 行